

平成 2 9 年度徳島県周産期医療協議会専門部会報告（案）

・ H28 年の乳児死亡 16 例の内訳

図1 死亡時期別

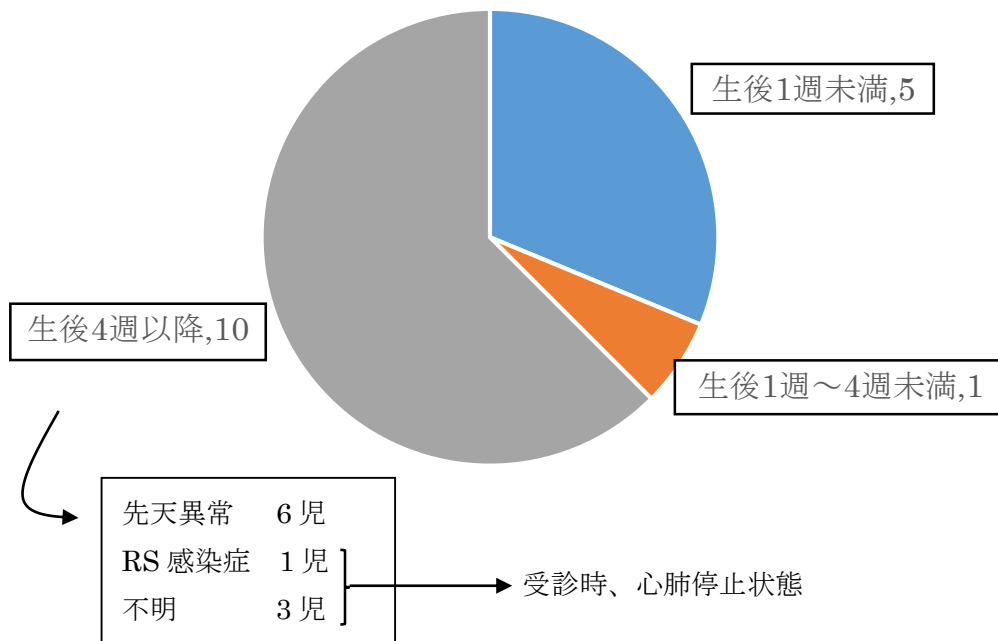


表 1 死亡時期別の年次推移

死亡時期	H25 年		H26 年		H27 年		H28 年	
	生後 1 週未満	10	14	7	9	4	7	5
1 週～4 週未満	4		2		3		1	
4 週以上	10		10		7		10	

図2 主な死亡要因 (16例)

生後4週以降に心肺停止
状態で受診

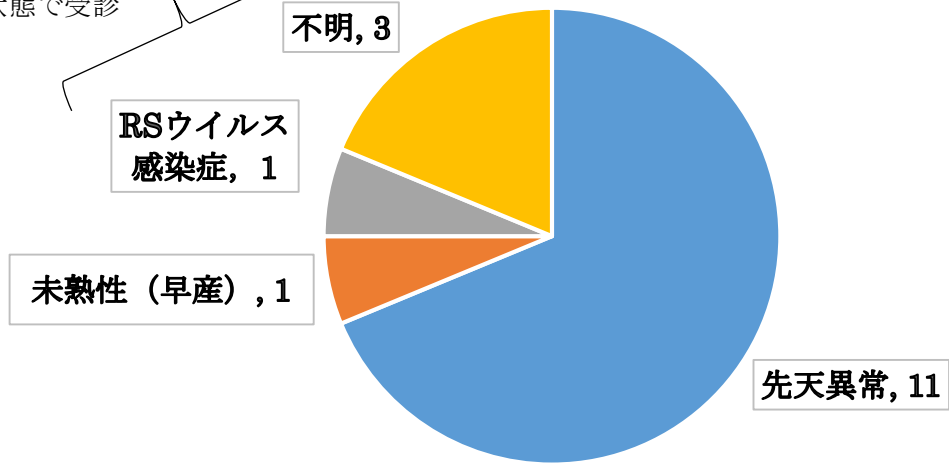


図3 死亡要因の年次推移（一部重複あり）

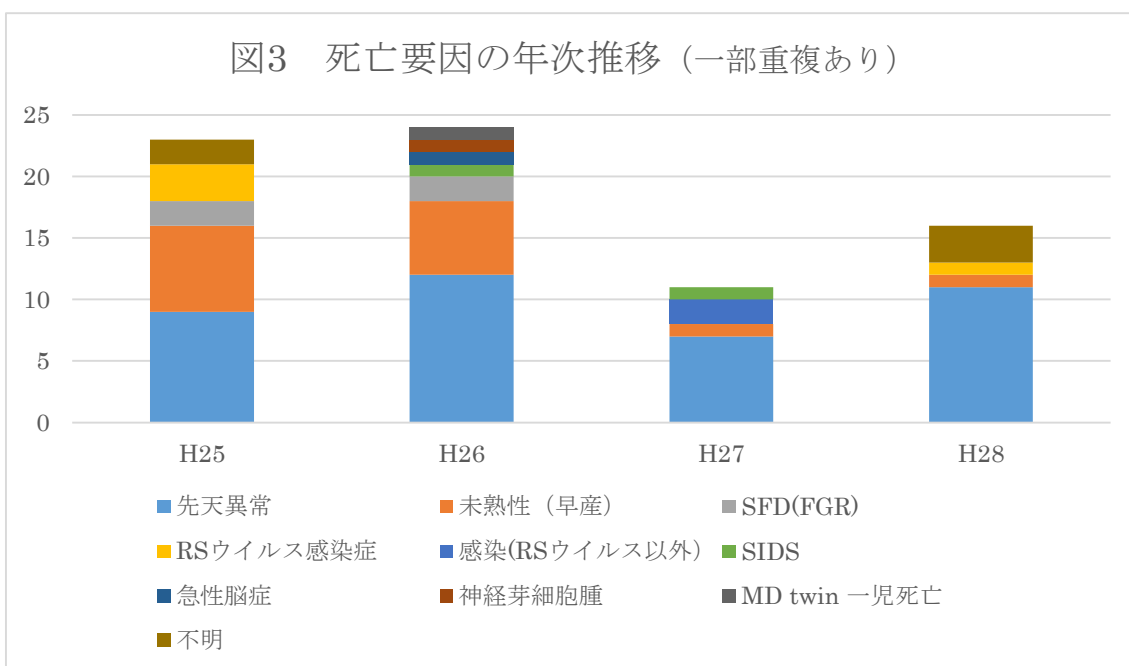


表2 生後4週間以降に突然の心肺停止状態で受診した症例（先天異常を除く）の年次推移

	H25年	H26年	H27年	H28年
症例数	4	2	3	4

【結果のまとめと考察】

- 新生児死亡数は 7→6 人に減少し新生児死亡率は 41 位→37 位に、周産期死亡率は 26 位→16 位に改善した。しかしながら生後 4 週以降の死亡が 7→10 人に増加したため乳児死亡としては 2 人増加し 43 位→45 位に後退した。
- 生後 4 週以降の死亡 10 例の内訳は先天異常が 6 例で、残り 4 例は突然の心肺停止状態で受診されたものであった。
- 突然の心肺停止状態で受診した 4 例のうち 1 例は RS ウイルス感染症で、残り 3 例の原因は特定できなかった。同様の症例は毎年 2~4 例発生している。
- 乳児死亡全体では従来同様に先天異常が乳児死亡の大半を占めた。

(先天異常)

- 先天異常症例には重症例が多く大きな改善は難しい面があった。毎年 10 例程度の死亡例があり著変はない。
- 胎児スクリーニングに問題がある症例はなかった。

(未熟性・早産)

- 未熟性が原因で死亡した児は昨年同様 1 例のみと少なく、新生児管理の改善、24 週未満の早産減少、多胎妊娠の減少によると考えられる。
- 未熟性が原因で死亡した 1 例は 23 週の胎胞突出例であった。頸管無力症が疑われる。早産の予測は困難であったが、22 週の健診時に頸管長測定が行われていたら頸管長の短縮を検出できたかもしれない。

(多胎妊娠)

- 多胎妊娠が 1 例あったが、1 児が 18 トリソミーの症例であり、先天異常が死亡要因であった。

(その他)

- 生後 4 週以降の突然の心肺停止状態で受診したものが 4 例あり、先天異常に次いで多い。1 例は RS ウイルス感染症と考えられたが、3 例の原因は特定できなかった。例年 2~4 例の同様の死亡例が発生しており、何らかの対策が必要であるが原因究明自体が難しい。

【対策】(赤字が今年追加したところ)

(多胎妊娠)

- 特に排卵誘発による多胎妊娠の発生を減らす

(未熟性・早産)

- 26 週未満の早産を減らす
 - 頸管長測定を積極的に行う (特に 18~24 週)

- ・多胎妊娠では 18 週から 2 週間毎の健診
- ・妊娠生活についての妊婦および社会への啓発
- ・ 22, 23 週出生の新生児の予後の改善する
 - ・ NICU の医師およびスタッフの増員およびさらなる技術の向上

(先天異常)

- ・ 先天異常の発症を減らし、またスクリーニングや治療成績を向上する
 - ・ 二分脊椎の予防：妊娠前からの葉酸摂取について、一般への啓発
 - ・ 先天異常のスクリーニングの向上
 - 胎児超音波スクリーニングの教育およびシステムの充実
 - 新生児 SpO₂ の普及
 - ・ ECMO(体外式膜型人工肺)の導入など、重症先天異常例に対しより集学的な治療体制の確立をめざす

(その他)

- ・ SIDS 及び RS ウイルス感染症による死亡を減少させる
 - ・ SIDS や RS ウイルス感染症について、広報やかかりつけの小児科医から一般への周知を図る。
 - ・ RS ウイルス感染症や SIDS に関するリーフレットを産科施設退院時等に配布
- ・ 死亡症例検討の継続が必要
- ・ 分娩施設や NICU・小児救急施設の重点化
 - ・ 周産期医療（小児循環器や小児外科や心臓血管外科を含む）や小児救急医療における医師・助産師・看護師の負担が大きい。分娩施設や NICU・小児救急施設の重点化およびスタッフの増員により、周産期医療および小児救急医療にかかわるスタッフの負担の軽減を目的とした徳島県全体の体制作りが急務である。
- ・ 生存できた児や家族への支援体制が必要であり、慢性期病棟や退院後の在宅支援などハードおよびソフト面の充実が急務である
- ・ 妊娠中の風疹、サイトメガロウイルス、トキソプラズマなどへの感染予防の啓発を推進する
- ・ 突然の心肺停止状態で受診した症例に対し、統一した原因検索のプロトコールを作成し、原因究明できる体制を構築する